

「…んで、お前ら、飯田のつきあつてる相手も知ってるのか？ どういう子だよ？」

にこやかに飯田を見送った馬淵は、一転して犬伏と橋埜を探るように見てくる。

「いや、いい子ですよ。真面目で性格のいい」

犬伏はしれつと言いつつ、意外にこの男はこの男で、とぼける時にはとぼけきる。

「そんなまつとうなこと、聞いてねえ。あのムツツリスケベを夢中にさせるぐらいなんだから、けっこうテク持つてる子なのか？」

「それこそ、知りませんよ。逆に俺らがそんなこと知ってたら、怖いじゃないですか」

犬伏はやれやれ、と腕を組み、椅子に座り直す。

「またあ…、なんか聞いてないのか、お前。前に飯田が、胸はなくてもいいけど感度は大事…みたいなこと言ってたって、俺に教えたのお前じゃねえか」

「あ、それ、ちよつと違います。何だっけかな…、『なけりや、ないでいいです。感度がよければ』…じゃなかったですかね？」

「一緒にやねえか、どう違うよ？」

「あー、一緒ですかねえ？」

犬伏はのりくらりと辮す手に出ているらしい。

馬淵はぼやく。

「つか、どいつもこいつもデートだ、見合いだって浮かれやがって、面白くねえ」

とどのつまりはそれなのかと、橋埜は目を伏せる。

「よし、お前ら。今日はエリナの新しいビデオの鑑賞会、俺の部屋でするからな」

馬淵は計画書には目もくれず、勝手に独り決めする。

「え、俺はいいです、明日はデートなんで、それに備えて早めに寝たいんで」

犬伏はけろつとした顔で、さっくり断る。

「はあ、聞いてねえ！」

「俺も美脚ちゃんとデートなんですよ、勘弁して下さい。体力温存したいんで」

「なんだ、体力温存って、このエロ男！」

「俺のつきあつてる相手は、美人でテク持ちなんで、そりや、もう体力使うっていうか…痛てっ！」

ぬけぬけと言つてのける男の脇を、橋埜は無言でドカリと肘で突いた。